

- 1 派遣期日 平成28年11月18日(金)
- 2 研修先 静岡大学教育学部附属特別支援学校
静岡県静岡市葵区大岩町1-15
<http://fzk.ed.shizuoka.ac.jp/yougo/news/793/>

3 研修内容

研究テーマ 児童生徒一人ひとりの確かな学びを育む授業づくり ～授業のねらいと指導内容の明確化を通して～ ○全体会、研究概要説明 ○公開授業参観(小学部3・4年生図画工作「どうぶつランドを作ろう!」) ○校内実践紹介 ○ポスター発表 ○研究協議 ○講演「確かな学びを育むために～アセスメント結果を授業に生かす～」大六一志氏

派遣校においては、テーマに迫るために、教職員間の意見の共有化と児童生徒のアセスメントに重点を置いて、授業の題材や目標の設定がされていた。目標設定では教科の目標と自立活動の目標をとらえており、本校が研究をしている自立活動の視点からも大変興味深い研修であった。充実した内容の研修の中で主に以下の3つを柱として報告をしたい。

(1) 「確かな学びを育む」ための話し合いの共有化

知的障害のある子ども達の指導にあたっては、指導目標や指導内容の設定の妥当性を高めることは効果的な指導を行う上で欠くことのできない視点である。「確かな学び」を追究するために、指導目標、内容の設定の過程を重視して取り組んでいた。研究を深めるためにはそこに至る話し合いを共有化する必要があった。そのために図1にある4つの取り組みがなされていた。



図1 「確かな学びを育む」ための話し合いの共有化

① 「エピソードシートの活用」

目標や内容設定のためには子ども達のアセスメントが欠かせない。教師が子ども達の日々の様子を記録することは当たり前に行っていることであるが、このエピソードシートはただ記録だけのものではなかった。そのエピソードから教師の考察があり、これからの授業計画の中で考えられる個に応じた支援が書かれていた。子どもの学びにより、もしかするとその支援は必要がないかもしれない。その時はその子の成長と捉える視点であると感じた。個々をよく見て理解するためにもこのような何となく記録するだけではない、今後に生かす「エピソードシート」であるのだと思った。

② 「見える化シートの活用」

「見える化」とは情報や物事全般が誰にでも分かるようにすることである。企業活動では業務の流れを映像やグラフ図表などによって分かるようにすることで、問題を共有し改善することに役立つとされる。この「見える化シート」によって、授業者の意図や学習のねらいが明確化された題材設定と取り組みが計画されていった。

研究協議の中で私たちもテーマに沿って10枚の付箋に思いつくことを書き出し現状を共有化してまとめることで、話し合いを膨らませることができた。模造紙大の見える化シートに教員の考えを書き出し考えを深めていた。文字化することで、視点が網羅され精選、焦点化される。更に漠然とした考えがまとまり、全員で検討しやすい。そして再確認しやすいという利点を体験することができた。これは、本校でも特に考えを広げ深めたい話し合いの際に大変有効な方法であり取り入れたいと感じた。

③ 「縦割り研究グループとマイナビシートの活用」

小中高の各学部で構成された縦割り研究グループが設定されていた。このグループで授業計画や目標設定、指導法などを定期的に話し合うことで、小中高の見通しを持った目標やそれを達成するための具体的な指導方法の視点が広がっていることが分かった。ここでの学びを各学年にフィードバックするために「マイナビシート」を全員がその場で記入し、学部やブロックで見せ合うことで共有していた。多くの教員の視点と指導技術を共有する大変有効な研修形態だと感じた。

(2) 公開授業参観を通して

① 「確かな学びを育む」ための工夫

実際に動物園に行った後での取り組みにより、特徴を捉えることにつながった。その日の制作計画ができていて、何の動物を作るのか見通しと目標が子ども達にとって明確だった。



② 「教科の中の自立活動」

動物ランドに下級生を招待しようという目標をもとに、見通しのある計画が掲示されていた。セロテープとボンドの接着にねらいをもった活動だったが、説明支援が十分にされ、前回までの学びを生かして本時が設定されているのが伝わってきた。説明時も教師は「使うのは何かな。」「気をつけるのはなにかな。」と間接的言語支援により確認していくことが多かった。制作場面ではほとんど教師の話はなかった。T1の先生は4名の児童を担当していたが、近くで見守るスタンスを崩さず、目配りをし、必要な時のみ最小限の支援をしていた。子どもの表現したい思いにスキルが追いついていない場面もあったが、そこでの葛藤があってこそ学びがあるということがわかる授業であった。先生の指導の在り方には感銘を受けた。

③ 「構造化」

箱を組み立て動物を作る図画工作のために、材料集めが十分にされていた。組み立てる順番に、体、手足、顔、尾などに合った材料がカゴに準備されていた。材料が見えやすいので部位に合った物を選択しやすかった。また、活動場所のプレイルームも、説明の場と活動の場、発表と鑑賞の場が区別されており、場面ごとに集中しやすく設定されていた。

(3) 「確かな学びを育む」ための「段階的なプロンプト」

プロンプトとは「子どもの目標を達成するために教師が働きかけて支援すること」である。一人ひとりの学習内容や実態に応じて必要とするプロンプトは当然異なる。過剰に支援をしがちになることもあり、本校でも実態に合ったちょうど良い支援をすることは課題のであり、分かりやすい段階表は参考にしていきたい。

指示の4階層

言語指示	間接言語指示→どうすればよいのかを気づかせる間接的言葉掛け（例：次はなに？）	↑ 自立度の高さ
	直接言語指示→何をすれば良いのか明確に伝える直接的言葉掛け（例：〇〇しよう。）	
ジェスチャー	物や方向を指し示す。	
見本の提示	方法そのものを見せる。	
手添え	動きや力加減を実際に触れて伝える。	

その他の支援

時間遅延
支援をする前に一定時間待つ。

視覚的支援
絵や写真などを視覚的に示す。

4 感想

今回の研修では、「見える化」が全てに通じていると感じた。特に特別支援教育はチームで個々の教育に携わる。教員間での話し合いや、目標に向かって同じ対応をしようとする共有化は子どもを目の前にしたときの私たちのベースである。派遣校の「見える化」は特に心に残った。効率化も大切であるが、書き出すことの中から視点が広がり共有化され精選、焦点化されてくることを忘れずに取り組みたい。「『見える化シート』はこの学校の先生方の共通言語になっている。」という言葉が印象的だった。それによってチームがよりまとまっていき、目指すところがはっきりと見えてくることを感じた。

子ども達にとっての「見える化」も至る所にあることで安心して学習や活動に取り組み、スパイラルアップが図られていることを改めて感じた。分かっているだろうではなくて、分かっていることを確認するためにも大切な「見える化」もあった。そして、余談ではあるが、参観授業の先生がそっと見せてくださった教室も、子ども達は居心地が良いだろうと感じる空間だった。今までの学習の蓄積や見通しが分かるコーナーがあり、教師が言葉を掛けなくても物の置き場所が整っていて分かりやすいなど構造化されていた。

今回の研修で学んだことを、本校にも伝え、より子ども達の目標に迫る指導支援につなげたい。そして「見える」教育を心に留めて、子どもたちと向き合っていきたいと思う。